

## 世紀を越えて ～茗溪陸上競技101年の歩み～

永井 純

人間総合科学研究科教授

### 陸上競技研究室と陸上競技部

わが陸上競技研究室には、体育科学専攻（博士課程）、体育研究科（修士課程）、体育専門学群3・4年生（卒業論文領域）の学生が毎年約50名が所属し、現在はこの学生諸君を4名の教官が指導しています。内容的には陸上競技をどのように行うかの方法論、陸上競技の指導をどのように行うかのコーチ論が主流を占めています。正しく行うためにいろいろな角度から検討を加え、理論と実際が一致するように研究を進めています。体育分野では、筑波大学になって新しい研究室も多く誕生しましたが、東京教育大学時代から続いている伝統のある研究室です。学生は全員が陸上競技部に所属し、研究題材はグラウンドにしかないことをモットーとし日夜精進しています。教官も陸上競技部ではコーチとして本務以外の時間で指導に励んでおり、陸上競技部を大学日本一にするだけでなく、国際大会での

日本代表チームの監督あるいはコーチとして手腕をふるっています。卒業生、修了生の進路は、中学・高校の教諭、大学教員、チームをもっている企業の選手あるいは指導者になり、学校体育、企業スポーツの発展に寄与しています。

### 陸上競技茗友会

東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学、筑波大学の陸上競技部のOB・OGで組織されています。会員数は現在で約2000名に達しています。多くの先輩は教育界の先達であったり、また現在も各県の教育界の中心人物として活躍されています。この会の目的は、会員相互の親睦を図ること、筑波大学陸上競技部の支援・後援を行うことになっています。陸上競技部は明治35年に当時の東京高等師範学校で徒歩部として設立されたのが始まりです。それから延々と歴史を刻み今年で102年になりました

た。毎年、懇親会と総会を開催し、OG・OGと学生が親睦を深めています。

## 部史「世紀を越えて～茗溪陸上競技 101 年の歩み～」の発刊

陸上競技茗友会（筑波大学勤務のOBも含む）、陸上競技研究室、陸上競技部が一体となって、A4版450ページの堂々たる標記の書物を発刊することが出来ました。構成は、1) 通史、2) 歴史的人物特集、3) 各年代の主将・主務による我らの時代、4) オリンピック出場者のコメント、5) 箱根駅伝、全日本大学男女駅伝区間賞獲得者のコメント、6) 陸上競技部が設立された後の101年間の戦いの跡（記録集）、7) 年譜からなります。通史では、東京高等師範学校・東京文理科大学、東京教育大学前半、東京教育大学後半、筑波大学前半、筑波大学現在に亘って整理しています。明治10年代にさまざまなスポーツがYMCAをとおり日本に入ってきます。それらのスポーツを広く普及させたのが東京高師・文理大の役割であり、特に多くの啓蒙書、技術書、ルールの著書が発刊されました。競技会の方は、東京高師の学生も文理大の校名で桐の葉のマークを胸につけインカレを戦い、早稲田大学と二大勢力を築きました。第2次世界大戦後は、大学制度が変わり、東京高師・文理大、東体専・東農専などが統一化され東京教育大

学になり、体育学部も誕生しました。前半期（東京オリンピックまで）では、新規に入学した人、東京高師、文理大、東体専からの編入、戦地から引き揚げてきた人の編入などで年齢差も大きく思うようにクラブの運営がなされませんでした。昭和28年頃からやっと戦力も整い、大学の強豪に復帰でき再び活躍が始まり、東京オリンピックに向けて多くの著名選手を輩出しました。後半期（筑波大学の誕生まで）では、東京オリンピックを境に緩やかに下降気味になってきます。これは、昭和44年あたりから全国に吹き荒れた学生運動が少なからず影響を及ぼしました。筑波大学になってからは、体育専門学群の学生を中心に頑張り、男女とも学生陸上競技界のトップに君臨しています。特に、女子は日本インカレにおいて16回優勝で、15年連続の快挙を続けています。歴史的人物では、金栗四三氏、野口源三郎氏、吉岡隆徳氏にスポットを当てました。金栗氏は、日本が初めてオリンピックに参加したストックホルム大会にマラソン代表として出場し、以後2回のオリンピックに参加しました。箱根駅伝の生みの親ともいわれています。野口氏は、自身もオリンピックに参加し、世界各国から大きく後れをとっている現状を体験し、日本全国での普及活動を展開しました。また、陸上競技における技術の分析にも優れ、この当時

としては希有な研究書も刊行しています。野口氏の理論と実際の一致は、以後体育・スポーツ界が脚光を浴びることにもなりました。吉岡氏は、100mにおいて世界記録を樹立するなど日本に吉岡ありといわれた人でした。特にロサンゼルスオリンピックでは、並みいる強豪を押し分け決勝に進出し、結果は6位でしたが30mまでは他の選手を大きく引き離し、世界中から「暁の超特急」と呼ばれ絶賛されました。我らの時代では、各年代での出来事などその時代背景が語られています。昭和の前半では、日本が戦争に向かっていく時期でもあり、2・2・6事件に遭遇したこと、箱根駅伝の1区を走りきったと同時に戦地に向かったこと、勤労奉仕での苦勞話、学業どころではなく、それぞれが故郷に帰されていたところ箱根駅伝出場で急遽東京に呼び戻されたことなど克明に記述されています。また東教大時代前半では、食糧難から徐々に食べ物が手に入るようになったこと、旅行に行くには宿にお米を持っていくことなど、その当時の生活ぶりに触れられています。東教大の終わりの頃は、新生筑波大とどのように融合していくか、陸上競技部の校名を、いつ東教大から筑波大に変更するかなどの学生諸君の苦勞と葛藤が描かれています。一方、筑波大初期では、つくば近辺の生活の不便さなどが取り上げられていますが、新しいもの

を創造するという強い意欲も現れています。

誌面の関係でこの書物の紹介程度にとどめましたが、詳しく読みたい方は中央図書館に納められていますので手に取っていただければ幸いです。

以上のように、筑波大学運動学分野における研究室は、それぞれの運動部と密接な関係があり、またOB・OGからの暖簾を守っていく仕組みになっています。ここに新たな研究が芽生えるものと思います。

陸上競技研究室 永井 純(教授)  
宮下 憲(教授)  
尾縣 貢(助教授)  
大山主悟(講師)

コーチング原論研究室 村木征人(教授) 協力  
(ながい じゅん/陸上競技コーチ論)